

# 思考範型としての「防災」を問う

—「社会対応論」構築に向けた一考察—

## 松本 行真

### 災害は忘れた頃にやってくる？

2018年7月の西日本豪雨は土砂災害などにより200名以上の犠牲者を出すという、数字上は東日本大震災に次ぐ規模の災害になった。地震と異なり豪雨はある程度予測可能であるものの、これだけの犠牲者を生み出したことにより、防災行政への批判が高まりつつある。

その一方で「防災そのもののあり方」をめぐる再考の萌芽もみられる。例えば片田敏孝は「『みんなで逃げる』地域作りを急げ」として、「『防災によって地域コミュニティを再生する』といった発想の転換が必要」（『Wedge』2018年9月号）と論じている。これは災害による責任（の一部）をコミュニティに担わせるという意味で、防災行政が大きな転機を迎えたのだろうか。

さらに2019年10月の台風15号、19号とそれに続く同月末の豪雨は主に東日本各地に大きな災禍をもたらした。これは「流域型洪水」と呼ばれるものであり、（主に気温上昇による）気候変動により「災害フェーズ」が変わり「想定を超える災害が起こる時代」になったとのことである（NHKスペシャル『巨大台風 流域型洪水の衝撃』<sup>1)</sup>）。

東日本大震災以降、こうした「想定外」は、それこそ毎年のように発生

する大規模災害の枕詞のように使われている。そして、「想定外に対応するための『さらなる』取り組みが必要だ」と、定型的な文句がそれに続く。その範囲は主として、気象現象解明や「国土強靱化」に連なる護岸等のハード整備はいうまでもなく、観測・予測シミュレーションや早期警報システムの構築、そして行政や地域社会を巻き込んだ防災教育・避難計画・訓練等のソフト面にまで及んでいる。筆者は主に社会科学領域を議論の対象としているため、前二者の理学・工学領域には立ち入ることは出来ない。そこで本稿では三つ目の「防災教育・避難計画・訓練等」を起点としたソフトにかかる議論にフォーカスしたい。

頭のいい、ことに年少気鋭の科学者が科学者としては立派な科学者でも、時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。科学は孔子のいわゆる「格物」の学であって「致知」の一部に過ぎない。しかるに現在の科学の国土はまだウパニシャドや老子やソクラテスの世界との通路を一筋でももっていない。芭蕉や広重の世界にも手を出す手がかりをもっていない。

そういう別の世界の存在はしかし人間の事実である。理屈ではない。そういう事実を無視して、科学ばかりが学のように思い誤り思いあがるのは、その人が科学者であるには妨げないとしても、認識の人であるためには少なからざる障害となるであろう。これもわかりきったことのものであってしばしば忘れがちなことであり、そうして忘れてならないことの一つであろうと思われる。(寺田寅彦『科学者とあたま』)

寺田寅彦は「災害は忘れた頃にやってくる」の言で有名な地震研究等の地球物理学の研究者であるとともに数多くの随想・時評等も発表している。この初出には諸議論がある<sup>2)</sup>ものの、文意が似た表現は彼による多くの随筆で確認されているため、その詳細には立ち入らない。筆者はその「使われ方」をあらためて考えてみたい。

## 教育、伝承、「自己」責任

いわゆる通俗的な解釈としては「人間は忘れるものであるから、忘れないように記憶、記録に残し、次に活かさねばならない」、特に東日本大震災以降は記憶、記録を「語り継ぐ」ために、複合的なしなかけを構築しようと、よりふみこんだかたちになっている<sup>3)</sup>。寺田も正しい科学的知識に関する教育と「災害の記憶と記録」の必要性をことあるごとに論じ、両者が災害対応における車の両輪とも解釈できる議論もある。つまり、(自然災害といった)現象に対する正しい科学的理解があれば、「災害から命を守る」といった対応も(おおよそ自ずと)出来るからと彼は考えたからである。

各地でこのように教育と伝承といった視点から様々な取り組みがなされていることは言を俟たない。問題なのはそれらが相互連関的に考えられたものになっているのかは、東日本大震災以降で発生した各災害において、避難状況があまり改善されない(西日本豪雨、翌年の同地区の豪雨の避難率。そして2019年10月の台風・豪雨)ことから、何らかの検討が必要なことを示してはいないだろうか。そこで冒頭の「住民にも責任を」といった議論である。災害を他人事(ひとごと)ととらえるのではなく、「自分事」で考えるべきだという思想に基づいている。筆者からみると、これは西日本豪雨以降にも問題になった「レベル4」=「全員避難」の考え方と軌を一にしており、それらを換言すると「行政による住民への責任の放棄=丸投げ」である<sup>4)</sup>。

少なくとも避難するか否かの判断は「住民(とその組織=地域住民組織)の責任」というのは筆者がこれまで主張していたところ<sup>5)</sup>ではあるのだが、大きく異なるのはそれに至る経緯である。おおよそにして防災の「専門家」は様々なしくみを検討し、それらを社会に実装することを目的としており、例えば科学的知識を教授する防災「教育」、避難計画立案に関する「ワークショップ」や「訓練」を各地で企画・実施している。これを「動員型(訓練)」と批判するのはもっぱら防災の専門「外」からのものであり、その多くが防災分野のメインストリームではない人文学・社会科学系に属するため、有効な議論につながっていないと筆者は考える<sup>6)</sup>。

問題は次のことである。「先生にいわれているいろいろとやったのは、先生のいうことを聞けばみんな安全だと信じていたからだ。それが今になって、『(住民) 自分たちで責任をとれ』とはどういうことだ」。これとほぼ類したことは過去になかったか。「(国・自治体や電力会社が) 原子力発電所は安全だというから、自分たちは受け入れた。それが、事故が起きて…」という、あれだけ批判のあった「安全神話」と同じ構造ではないか。それを事前復興ならぬ、「事前（に責任を回避するという意味での）放棄」といえないか。いろいろと動員されて訓練などをやってきた住民たちは梯子を外された存在となってしまふのである。

本稿のねらいの一つは（畑村洋太郎 2011 の言を借りれば）こうしたことの責任を追及するものではなく、何故にそうした結果に至ったのかという要因を探る（原因究明）ことにある。そこに寺田の議論を、彼の本来の意図を探りつつ、引き寄せて考えていきたいのである。

## 事象をめぐる「両義性」

さて、冒頭の寺田の文章に立ち戻ろう。彼は本当にただ「忘れないようにしよう」とだけ述べていたのだろうか。彼の遺した様々な随筆を渉猟すればわかることだが、論の基底をなすのは両義性へのまなざしがあり、それを諧謔的な表現を用いつつ、読者に伝えるためにいわば戦略的に一方（片面）を強調しているともいえる。それが先に引用した一段落目の「格物」≒「致知」としての科学であり、（何らかの言語を用いても科学としては説明できない）それ以外の領域を「事実」として注意を払わねばならないのだが、このような「わかりきったこと」も認識できない人が多いのである。防災の専門家たちのいう寺田像は如何なるものなのか<sup>7)</sup>。

これらをふまえた上で「災害は忘れた頃にやってくる」の再解釈が求められるだろう。これは「災害を忘れてはいけない」を「量的」な問題（ないしは次元）に転換した視点ではなく、災害を招く「しくみ」が繰り返すという「質的」な問題提起だったのではないか。そう考えると、彼の言葉を引きつつ災害に備えること「だけ」を唱えるにとどまらず、それをいわ

ゆる量的分析を起点／中心とする工学系による主導で進めるのはまったくのナンセンスである。なぜかというと、寺田は物理学をはじめとした諸科学の発展における量や質の両面からの視点の必要性を論じているのであり、彼はとりわけ前者の「量」が物理学研究の中心となりつつあることに懸念を示していたからである。恐らく、物理学における実験や着想からの仮説・仮定は「質」が起点になるものであると考え、量的な議論が中心になると、その拡がりや深みに限界があることに懸念を示したのではないか<sup>8)</sup>。

寺田の慧眼は、ごく日常（的な時間のなかで観察される）の自然現象から普遍的（という意味での非日常的な時間）な（科学的な）法則をみいだすところ、さらにいえば日常／非日常や普遍／個別といった連続性／非連続性を論理の基底にすえていることにある。このような両義性を持った推論を重畳しつつ議論を展開した寺田が「非日常に備えましょう」と、真正面（直線・単線的、一方向的な視点）から論じようと意図したとはとても考えられない。寺田が懸念した過剰な「量的」視点による議論は現在の防災パラダイムも同様な傾向に至ってはないだろうか、もっと言うと防災の専門家たちが寺田の考えた本来の意図と異なった文脈で用いているのではないか。これが筆者の問題意識の起点にある。その陥穽が例えば、「想定外」を想定「内」にすることに邁進するのが現在の防災パラダイムといえ、その限界は先にも論じたレベル4の「全員避難」にすでに現れていると考える<sup>9)</sup>。また、吉原直樹が指摘していたところであるが、東日本大震災以降、絆やコミュニティに関する「インフレーション」が生じていた（吉原2013）。いわば「言葉が踊る／上滑る」といった社会状況を背景にしつつ、防災の領域でもまさに百花繚乱というか、様々な言葉を駆使し、さらなる防災研究が必要であるという世論形成を進めていたのではなかろうか<sup>10)</sup>。

## 両義性なき「防災」

「防災」「減災」「縮災」はよく知られた用語であるが、最近よくマス・メディアを通じて喧伝される「避難スイッチ」<sup>11)</sup>とは何だろうか。あえて単純にまとめると「○○の状況になったら（反射的に）避難」と、あえていう

と人々を思考停止状態にして避難させるしくみである。この状態をつくるのが各住民であり、それを決定するのがそれらを取りまく（町内会や自主防災組織等の）住民組織に帰されるという点で「住民にも責任を」という文脈に包摂されていくものと考えられる。しかしながら、こうした思考枠組みを提唱し、提示するのはどこの誰なのか。それらは防災の専門家であり、制度化するのは行政機関なのである。そうすると、思考停止を促す起点となる彼らに「も」責任はあるのではないか。「避難指示→何も考えないで避難」は該当地域における代表的・平均的個人を想定するのならそれでよいのかもしれない。ただ、そうした単純な社会モデルが社会動向を説明するのに苦境に陥っているのは経済学を一瞥するまでもないのではないか。平均から外れた人たち、例えば支援を要する人たちは（主に社会福祉協議内などの）行政関連機関が中心となってしくみを構築し、災害時の避難（支援）の主導的立場を担う、という考え方もできよう<sup>12)</sup>。

しかしながら、「木に竹を接ぐ」ような複雑なモデルが有事下にどれだけ有効なのかは甚だ疑問を抱いてしまう。というのも、東日本大震災での津波により甚大な被害を受けた福島県沿岸部のある住民はこんなことを筆者にいていたからである。いろいろなパターンに分けた避難訓練が必要ではないかといった提案に対して、「そんな複雑な避難訓練をやっても仕方ない。要は逃げるか、逃げないか、なんだよ」。逃げる／逃げない、という二元論的な思考に留まるのであれば、先の「スイッチ」も有効な手立てかもしれない<sup>13)</sup>。ただ、それは「思考停止」という人々を思考の（平面でなく直線的な）一元的な次元に落とし込んでしまうのである。ふだんは多様性やそれらの共生を喧伝している専門家やメディアも、こうした有事下で「一様」を強いることへの疑問、もっといえば違和感を抱かないのだろうか。おそらく抱いていないのだろう。それは災害という（その発生に対して）誰にも責任を問えないと考えているからである。一方で何処かに責任の所在があるとされる（有事の代表例ともいえる）「戦争」に対してはどうだったか。否定的ではなかったか<sup>14)</sup>。今さらながら「ガヴァメント（上）からガヴァナンス（下）へ」等の議論を引き合いに出すつもりはないが、これだけ情報収集のためのツールが多様化しているなかで、「避難へ」と一様な

行動をとるように「強制」するようなしくみを構築するのは無理がないだろうか。もちろん、これらを別に全面的に否定するわけではない。ただ、こうした言葉を考えて用いる際に、どれだけの広くかつ深い議論を様々な思想や論理を持つ領域の研究者との間で「批判」的検討を行っていたのかということである。もし本当にそこまで考えているのであれば、簡単に「住民の責任」や（なかば人々の思考停止を促す）「スイッチ」という議論には至らないと筆者は考えるのである<sup>15)</sup>。

## マス・メディアと軌を一にする「防災」専門家

さて、こうした防災の専門家と歩調を合わせ、世論形成への役割を果たしているのがマス・メディアである。インターネットをはじめとしたメディアやSNSなど情報の発信方法の多様化が進むなかでも、社会に与える影響が依然として大きいのは東日本大震災以降、福島「風評被害」をとりあげるまでもなく明らかである。

新聞編集者は事実の客観的真相を忠実に伝えるというよりも読者のために「感じを出す」ことの方により多く熱心である。（『静岡地震被害見学記』）

活字の大小の使い分けや、文章の巧妙なる陰影の魔力によって読者読後の感じは、どうにも、書いてある事実とはちがったものになるものである。実に驚くべき芸術である。こういうものがいわゆるジャーナリズムの神髄とでもいうのであろう。（『錯覚数題』）

これらの論考は当然ながらテレビ前夜の時代であるために、上記すべてを受容し首肯するわけにはいかないものの、その基底にあるのは変わらないのではないか。もしかすると、マス・メディアの相対的地位（とその競争力）の低下するなかで、読者や視聴／聴取者が求めるいわば“*What's new*”なるものを提供し続けなければならないという意味では、より「感じ

を出す」ものを刺激的に、強く、出さねばならないのではなからうか。

そうしたなかで象徴的であったのは、2019年12月1日から8日にかけて放送されたNHK『体感 首都直下地震ウイーク』であろう。CGやドラマ仕立てにして出来るだけセンセーショナルなものとして様々な「量的」で「わかりやすい」技術を駆使するのは、(テレビがないという時代こそ異なるが)上記の寺田の指摘、そして西部邁が一連の論考(例えば西部1987など)で指摘していた「テクノマニアク＝技術偏執狂」の世界をまさに体現したと感じたのだが、それは筆者の(偏光レンズを通した)穿った見方であろうか。「マス・メディアと(寺田のいう「頭のいい」)科学者の連携」がこのような「防災プロパガンダ」を進めてしまっているのではないか<sup>16)</sup>。

つまるところ、その段階まで現状の防災パラダイムが行き着いた／行き詰まった、換言すれば、そこまで徹底しないと一般の住民には(防災の専門家が日々注意喚起する)「災害意識の必要性」を訴求することが難しくなったといえるのだろう。インド洋津波の衝撃的な動画はテレビだけでなく、YouTube等の動画投稿サイトで「いつでも」視聴可能であるが、それらがその後の災害に教訓として「あまり」役に立たなかったのは東日本大震災でも明らかである<sup>17)</sup>。先の西部も指摘しているが高度な技術によって生み出された非日常的な刺激は「慣れ」るものである。日常からどう関連付けるのか。日常生活のダイナミズム(平凡の非凡)からどう立ち上げるかが問題の本質にあるのではなからうか<sup>18)</sup>。

このようにマス・メディアと防災系の専門家による連携が進めば進むほど、日常と非日常との分断がより大きくなり、それらの連携が刺激的という意味で効果的になればなるほど、人びとは現実味を帯びなくなり、いきおい「他人事」になっていく(→逆効果になる)のではないだろうか。そうした状況に陥ったとして、どう処方を実施せばよいか。そして何故に、日常と非日常の接続が必要なのか。以下ではそれを考える補助線として、危険と危機の関係を考えてみたい。



## 想定範囲「内」

ナイトの議論を敷衍して、危険 (risk) の管理 (management) はある確率分布という「想定範囲内」で個人やそれに準じる単位で対応できるのかもしれないが、危機 (crisis) は管理できず、その対応は「組織」でしかなしえないと論じたのは先の西部である。これらの差異を考慮しきれないところに、工学分野を起点・中心に据えた防災パラダイムの限界 (または境界) があると筆者は考える。というのも、彼らが標準として (無意識的に) 依拠するのは、古典的な還元主義、さらには、やはり古典的な功利主義的な観念 (諸個人の単純和 = 社会) で地域社会をみているからである。つまり、(モデル化や計算が難しい) 相互作用などといった「創発的」な議論というよりは<sup>19)</sup>、「一方向的な」「樹形図」で示される単純に構造 (モデル) 化された社会なのである。一方で、こうした防災パラダイムの長所 (逆にいえば、人文学・社会科学系の短所) にあげられるのは、社会への実装という「みえる」「わかりやすい」かたちで社会に示すことができるところにある。ただ、逆にいうと量的な検討→モデル化=単純化することは、量的には検討し得ない質的な領域を「(1次、2次…、n次とどのレベルであろうと) 近似的に」除去することに他ならない。ということは、その段階で想定「外」を生み出しているのである。工学と理学の違いの差こそあれ、次の議論をふまえて「近似」しているだろうか。

複雑な実際問題を研究して先ずその真相を明らかにしようという場合には、先ずその大体を明らかにして枝葉を後にするのが肝要である。これも多くの人にとっては平凡な事であろうが、世人からは往々忘れられる事である。渾沌とした問題を処理する第一着手は先ず大きいところに眼を着けて要点を攫 (つか) むにあるので、いわゆる第一次の近似である。しかし学者が第一次の近似を求めて真理の曙光を認めた時に、世人はただちに枝葉の問題を並べ立てて抗議を申込む。例えば天気予報などもある意味においてそうである。第一次の近似だけでもそのつもりで利用すれば非常に有益なものである。第二次第三次と進

むには多大の努力と時日とを要する事は云うまでもない。これも学問を応用しようとする学者と、応用の結果を期待する世間とを離間する誤解の原因であろうと思う。眼前の小利害にのみ齷齪（あくせく）せず、真に殖産工業の発達を計り、世界の進歩に後れぬようにしようと思す人は、もう少し基礎的科学の研究を重んじ、またこれを応用しようという場合には、少し気を永くしてあまりに急な成效を期待しないようにしなければならぬと思われる。（『物理学の応用について』）

また、工学系主導による防災の議論における最大の陥穽は（同じような隘路にはまっているといえる）経済学とは異なり、どこまでを検討の範囲にして、どこから先を範囲外にするのかを、恐らく「意図的に」曖昧にしているところにある<sup>20</sup>。そうした前提をふまえると、行政主導型から住民参加型へといえども、結果として専門家による知識移転を「強いる」意味での「動員型」の避難訓練が、西日本豪雨あたりから避難における「住民の責任」を問う議論が（工学系を中心とした）防災の領域から出てきたことにはさほど違和感はない。本来ならば近似して捨象した部分（そして両者の関連）を検討するのが人文学・社会科学系領域のはずである。しかしながら、国立大学の文系領域の縮小傾向もその背景にあるのか、調査研究の概念構築や設計を工学系が行い、人文学・社会科学系はその指定された部分を請け負うという、いわば工学系の「下請け」になりつつあるのが現状ではないか。

## 想定範囲「外」をどうみるか

「無知の知」の文脈で考えるならば、知への探求という営みにはどこかで「線引き」をしなければならない。そうした意味でも、どの領域にも得手不得手があるものだが、不得手の部分だけをとりあげてすべてを否定（「一緒にできない→排除する」）しまうのはどうだろうか<sup>21</sup>。

これについても寺田の言を借りよう。

学説を学ぶものにとってもその完全の程度を批判し不完全な点を認識するは、その学説を理解するためにまさに努むべき必要条件の一つである。しかしここに誤解してならない事で、そしてややもすれば誤解されやすい事がある。すなわちそういう「不完全」があるという事は、すべての人間の構成した学説に共通なほとんど本質的な事であって、しかもそれがあつたために直ちにその学説が全滅するというような簡単なものとは限らないし、むしろそういう点を認める事がその学説の補填に対する階段と見なすべき場合の多い事である。(中略)「完全」でない事をもって学説の創設者を責めるのは、完全でない事をもって人間に生まれた事を人間に責めるに等しい。人間を理解し人間を向上させるためには、盲目的に嘆美してはならないし、没分曉に非難してもならないと同様に、一つの学説を理解するためには、その短所を認める事が必要であると同時に、そのためにせつかくの長所を見のがしてはならない。これはあまりに自明的な事であるにかかわらず、最も冷静なるべき科学者自身すら往々にして忘れがちなる事である。(『相対性原理側面観』)

「災害は忘れた頃にやってくる」という寺田の言を金科玉条のように防災の専門家が持ち上げるのであれば、こうした寺田の真意をとらえたうえでなければ、「言葉が踊る」という実態、そしてそれはマス・メディアが担うべきものを、「科学者」と称する人たちが行うべきなのか、甚だ疑問に感じるのである。防災研究や政策立案に関わる現状はどうか。甚だ心許ないのではないだろうか。

冒頭でとりあげた『科学者とあたま』は以下のように論考を終えている。

この老科学者の世迷い言を読んで不快に感ずる人はきつとうらやむべきすぐれた頭のいい学者であろう。またこれを読んで会心の笑みをもらす人は、またきつとうらやむべく頭の悪い立派な科学者であろう。これを読んで何事をも考えない人はおそらく科学の世界に縁のない科学教育者か科学商人の類であろうと思われる。(『科学者とあたま』)

これまでの議論について、もっぱら工学系の防災専門家は「これは科学者＝理学者のことだろう。彼らは莫大な金を使って役に立たない研究をする（ことが多い）」と反論するかもしれない。では、その科学者たる寺田の「災害は忘れた頃にやってくる」という言を用いるのはいかがなものか。今、メディアを賑わせているいわゆる「防災の専門家」が第三のタイプでないことを切に願う次第である<sup>22)</sup>。

※本稿は平成30年度三菱財団人文科学助成『民衆知と非日常行動の比較社会学的研究』、JSPS 科研費『民衆知と日常／非日常行動の視座による防災・減災パラダイムの再考』（19K21714）、同『噴火と原発事故からの広域避難をめぐる住民組織の役割と変容に関する比較社会学的研究』（19KK0048）による成果の一部である。

#### 脚注

- 1) 初回放送2019年10月17日。
- 2) 中谷1988では「天災・・・」について直接言及している。それらの背景も含めた議論は初山2017を参照のこと。
- 3) 柴山・ボレー2018では東日本大震災以降の震災アーカイブを概説しているが、そこでの主張の一つに、教訓を理解するためには多種のコンテンツを組み合わせる必要があるとしている。
- 4) コミュニタリアンがいわゆる新自由主義的な文脈による「自己責任論」へ回収される議論については吉原2011を参照のこと。
- 5) 社会実装を視野に入れた議論として、地域メディアとの連携で情報収集・共有・発信の体制構築の準備的考察を行った松本2020を参照のこと。
- 6) 当然ながら、「住民主体」のワークショップによる避難計画策定、避難訓練の実施など、これも数多く行われている。これも「かたちを変えた動員」と筆者は考える。何故かというと、これらのメニューを提案するのはあくまでも外部の専門家であることが多く、「先生がいうからやってみようか」という広義の意味で動員型の陥穽から逃れられていないからである。
- 7) 専門家とは少し異なる議論になるが、論考を進めるにあたり、東日本大震災後に刊行された寺田寅彦の災害に関するいくつかの随筆集を求めたのだが、その多くが災害そのものを扱った論考であり、彼の思想の基層をなす科学、教育、メディアなどを主対象とした随筆が少なかったことを付け加えておく。また、『天災と国防』における畑村洋太郎の解説も、寺田の思考枠組み（の外観）を引き合いに出しているものの、それらに通底する両義性の論理までには立ち入り切れていない。その象徴的なものが寺田には必須の

6つの視点（「構成要素」「マイクロメカニズム」「マクロメカニズム」「全体像」「定量化」「時間軸」）があるとして、その一つの「対象や現象を量的に捉える視点がある」という定量化の視点に着目している。ところが、寺田は『量的と質的と統計的と』のなかで次のように述べている。

ガリレー、トリツェリ、ヴィヴィアニ、オットー・フォン・ゲーリケ、フック、ボイルなどといったような人はなほだ粗末な今から見れば子供のおもちゃのような道具を使って、それで生きた天然と格闘して、しかして驚くべき重大な画期的実験を矢継ぎばやに行なったのがそもその始まりである。

この歴史的事実は往々、「質的研究が量的の研究に変わったために、そこで始めてほんとうの科学が初まった」というお題目のような命題の前提として引用される。これは、この言葉の意味の解釈次第ではまさにそのとおりであるが、しかしこういう簡単な、わずか一二行の文句で表わされた事はとかく誤解され誤伝されるものである。いったいにこの種類の誤伝と誤解の結果は往々不幸にして有害なる影響を科学自身の進展に及ぼす事がある。それはその命題がポピュラーでそうして伝統的権威の高压をきかせうる場合において特にはなほだしいのである。

これは「かたち」といういわば質的ともいえる視点の重要性「も」論じる、寺田の一面しかとらえていない。これも（両義性を理解しきれない）工学者にありがちな、先の陥穽に陥っている例といえるのだろうか。

- 8) 質的に間違った仮定の上に量的には正しい考究をいくら積み上げても科学の進歩には反古紙しか貢献しないが、質的に新しいものの把握は量的に誤っていても科学の歩みに一大飛躍を与えるのである。（『量的と質的と統計的と』）
- 9) 筆者らが福島県いわき市の四倉地区で実施した【2019年10月台風19号・豪雨調査】（松本・杉安2020）によれば、マス・メディアや行政から発せられた数多くの気象情報が多すぎたゆえに「（避難など）何もしなかった」という人も多く見受けられたことは早期／即時・詳細等を目標として早期警報システムを構築した既存のパラダイムに重大な疑問を投げかけてはいただろうか。
- 10) これも当然のことであるが、完全に否定すべきものでない。ただ、こうしたプロセスにおいて、寺田のいう「科学ばかりが学のように思い誤り思いあがる」科学者による「排除の論理」（？）が働いていたのが問題なのである。これに対して『ルクレチウスと科学』において次のように述べている。

問題は畢竟科学とはなんぞや、精密科学とはなんぞやということに帰着する。しかしこの問題は明らかに科学の問題ではなく従って科学者自身だけでは容易に答えられない問題である。（中略）…学者が自分の題目だけを追究している間は少しの不都合も起こらないのであるが、一度こういう学者たちが寄り合って、互いに科学というものの本質や目的や範囲に関する各自の考えを開陳し合ってみたら、その考えがいかに区々なものであるかを発見して驚くことであろうと思う。甲が最も科学的と思う事が乙には工業的に思われたり、乙が最も科学的と考えることが甲には最も非科学的な遊戯と思われたりするという意外な事実気がつくであろう。

丙は数理の応用が最高の科学的の仕事だと考えている間に、丁は実験や測定こそ

真に貴重な科学の本筋であると考えているのを発見するであろう。もっともこのようにめいめいの見解の相違する事は、必ずしも科学の進歩に妨げを生じないのみならず、あるいはかえってむしろ必要な事であるかもしれない。

こうした姿勢はまさに総合科学を目指す防災の専門家間だけでなく、(必ずしも有事を想定とする防災を専門にしない) その周辺の人たちも巻き込んで行われるべきではないだろうか。

- 11) 例えば矢守 2018 の議論を参照のこと。そこでは次のように記されている。「実際に逃げる当事者が、自分なりの「避難スイッチ」を設定して、自分で「スイッチ」を押すという構図(役場や気象台に押しってもらうのではなく)を作ること、および、それを実現するための支援(特にそのための情報活用)を行うこと」(同)。
- 12) 例えば、全国社会福祉協議会 2019 による「災害時福祉支援活動の強化のために一被災者の命と健康、生活再建を支える基盤整備を一(提言)」に詳しい。その提言の一つに「総合的な拠点としての「災害福祉支援センター(仮称)」の設置」があげられている。この提言に通底した論理への疑問として、新しい組織をつくるまに既存の組織やネットワークの見直しや組み替えーリストラクチャリングーの可能性を論じる必要はないのか。体系が複雑になればなるほど、災害時への対応が難しくなるのではないだろうか。
- 13) 複雑にすればするほど、一般の住民の理解とその対応(とりわけ有事下)が難しくなるであろうことは容易に想像できる。さらにそうした「しかけ」がより稠密になることが逆に応用力を低下させるという矛盾に逢着することに留意すべきである。脚注 9 でも言及したが、「情報が多すぎてなにもしなかった」という結果をどうみるか。
- 14) そうした文脈でとらえると、東京都による「防災隣組」への取り組みに対して批判的な議論、「隣組が近現代史において果たした役割にあまりにも無自覚であると言わざるを得ないこのネーミング」(吉原 2013)が出てくるのも理解できる。
- 15) 防災の専門家による「必ず来る」となかば脅迫的に喧伝される「南海トラフ地震」への喫緊対応のために「便宜的・暫定的」に定めたものだ、という抗弁であるのならもはや何もうことではない。
- 16) マス・メディアと防災の専門家(とその背後にある行政機関)との連携による過剰な演出=ジャーナリスティックに訴えるのは必然なのかもしれない。先のコミュニティ・インフレーションではないが、両者を用いる「言葉」が踊るといふ、その「軽さ」に違和感を抱いてしまう。詳細な論考は別で行いたい、こうした言葉を用いることの覚悟の欠如といった要因を例えば「真剣な遊び」に求められないだろうか。つまり、遊びにおける「小児病」(ホイジンガ 1938=1973)。非日常における「真剣な」遊びが、日常の真剣でない(ゆるい、「覚悟」のない)「遊び」になっている文脈と、防災の取り組みが相同しているのではなからうか。敢えていえば、あたかも商品開発、「新商品」といった(質の悪い)マーケティングを行っているようなものではないか。
- 17) さらにいえば、2016 年 11 月 22 日に福島県沖で発生した地震による東北地方太平洋沿岸で発せられた津波警報をめぐる混乱、とりわけ自動車避難による大渋滞が発生した。東日本大震災以降に制定された 11 月 5 日「世界津波の日」での津波を想定した避難訓練から 3 週間足らずでも(もちろん、教訓が活かされたところもあっただろう)このよ

うな結果である。

- 18) 西部が論じていた保守思想＝漸進主義のアプローチについて、これは実は日常の延長線・周縁上にある有事下の災害対応との関連で親和性が高いと筆者は考える。また、先の議論に引き寄せれば、テクノマニアク＝偏執狂とメディアによる連携への批判は西部が以前行っている。彼はいわゆる「啓蒙主義的」な視点への批判を展開しており、いわゆる経験主義的な議論を好んでいる。これは防災の議論に節合出来ないだろうか。具体的にいえば、クリフォード・ギアーツのいう本来の意味でのローカル・ナレッジ（民衆知）をどう組み込むかであるが、これらについては稿をあらためて論じたい。
- 19) (モデルに相互作用を内包する) 複雑系やネットワークエージェントモデルなどを組み入れたとしてもその限界はあると考える。
- 20) 経済学は社会科学に属するとともに、その学問的性質により周辺領域からの「思想」的批判を受けることもあり、そうした近似は周到にいわば「確信犯的に」行われている。そのために修正的な（仮定を緩める）議論が矢継ぎ早に出るのだが、数理的な稠密さは問われるものの、諸仮定における論理的整合性については相対的にあまり問われない。もし意図的でないのなら、それはそれでかなり深刻な問題である。例えば、次のようなことである。

方則というものの見方が色々あるように思われる。吾人がある有限な条件を限ってこれを指定し、他の影響は全くないと仮定した場合の結果を云い表わすものとも云われる。これは簡単明瞭であるが抽象的である。この考えでは方則を云い表わす方程式は初めから有限の独立変数を含む有限の項から成るものである。しかし厳密に云えば、かくのごとき抽象的の状況は実現する事の出来ぬものである。もう一つの見方は、この方程式の後尾へそれ自身に小さくまた沢山の場合の平均が零に漸進するような無限級数を附加して考えるのである。平たく云えば、方則というものを一種の平均の近似的の云い表わしと考えるのである。そうすれば方則というものはよほど現実的な意味を持つようになって来る。このような区別は甚だつまらぬ事のようにであるが、自分はあるがちそうとは思わない。(中略) 懐疑と想像とは科学の進歩に必要な衝動刺激である。疑い且つ想像をめぐらす前に、先ず現在の知識の限界を窮めなければならぬ事は勿論である。現在科学の極限を見極めずして徒らに奇説を弄するは白昼提灯を照らして街頭に叱呼する盲者の垂類である。方則を疑う前には先ずこれを熟知し適用の限界を窮めなければならぬ。その上で疑う事は止むを得ない(『方則について』)。

要は批判（ないしは無視）の対象にしている人文学・社会科学領域の限界を知り、それを引き出そうとしたのかである。当該領域の専門家にもその問いを持たねばならないことはいうまでもない。

- 21) 筆者自身は次のようなことを工学系の研究者からいわれたことがある。「(人文学・社会科学系をひとくりにした) 文系はわかりにくい議論をいつもしていて、しかも結果がすぐに出てこない。現在はわかりやすく、そして成果が速やかに出ないと社会から理解されない。そのあたりを工夫してくれないと我々とは一緒に調査研究を進めることは難しい(文系と一緒にやる必要はないのではないか)」。



22) 本稿執筆の段階では依然として収束／終息がみえない「新型コロナウイルス」騒動も、基底にあるのは同じものとする。先にも論じたが、防災を起点にした議論には「上から下へ」といった「社会体制」の構築への傾きが強い。一方で、騒音や環境問題などに端を発した「下から上へ」を考究してきたのは「社会運動」論であり、両者の溝は大きい。とりわけ、責任の奈辺がみえにくい疫病はどちらか一方の視点で論じるのは不十分ではないか。なぜかというと、「上から」による議論は自己責任論へ、「下から」は政府・行政機関の責任論へと至るのであり、両者が交差しないねじれの位置の議論一問題の解決へ至る協働に向けた場所がうまれない／うまれにくい状況—になるからである。「他の条件は（相対的に）一定」という思想がそれらの論理に通底していて、それらの相互関係・作用にまで立ち入ってないことも理由の一つであろう。

こうした背景からか、社会体制構築の視点から地域社会を構想する防災・減災の議論に、住民主体の社会運動を起点としたガヴァナンスへの節合を試みようとしても、「避難スイッチ」にならざるを得ないのではないか。社会運動、社会体制の両者を、その両側から、それらの相互作用や関係を包摂する—相対的にマクロな社会変動論に対応するかたちとなるマイクロでかつ政策論への架橋となりうる—「社会対応論」の議論が求められると考え、筆者の課題とした。

#### 参考文献

- 柴山明寛、ボレー・セバスチャン、「東日本大震災アーカイブの概要と総論」『デジタルアーカイブ学会誌』2巻4号、2018
- 寺田寅彦、「量的と質的と統計的」と『寺田寅彦随筆集 第三巻』岩波書店、1963
- 、「科学者とあたま」『寺田寅彦随筆集 第四巻』岩波書店、1963
- 、「錯覚数題」『寺田寅彦随筆集 第四巻』岩波書店、1963
- 、「相対性原理側面観」(『寺田寅彦随筆集 第二巻』岩波書店、1964
- 、「物理学の応用について」『寺田寅彦全集 第五巻』岩波書店、1997
- 、「方則について」『寺田寅彦全集 第五巻』岩波書店、1997
- 、「静岡地震被害見学記」『寺田寅彦全集 第七巻』岩波書店、1997
- 中谷宇吉郎、「天災は忘れた頃にくる」『中谷宇吉郎随筆集』岩波書店、1988
- 西部邁、『大衆の病理』日本放送出版協会、1987
- 畑村洋太郎、「解説」(寺田寅彦著)『天災と国防』講談社、167-204、2011
- 初山高仁、「「天災は忘れた頃来る」のなりたち」『尚綱学院大学紀要』73、1-13、2017
- ホイジンガ J、(高橋英夫訳)『ホモ・ルーデンス』中公文庫、1973
- 松本行真、「平時・有事におけるコミュニティ放送局の役割と課題—北海道胆振東部地震を事例に—」『日本都市学会年報』53、2020 (近刊)
- 松本行真、杉安和也、「民衆知と住民避難—豪雨・土砂災害の対応—」『民衆知と非日常行動の比較社会学的研究—インドネシア・バリ島アグン山噴火をめぐって—』(2019年度科学研究費・三菱財団人文助成報告書)、2020
- 矢守克也、「空振り・FACPモデル・避難スイッチ—豪雨災害の避難について再考する—」『消防防災の科学』134、7-11、2018



- 吉原直樹、「コミュニティ・スタディーズのために」『コミュニティ・スタディーズ』作品社、15-32、2011
- 「ポスト3・11の地層から」（伊豫谷・吉原・齋藤著）『コミュニティを再考する』平凡社、91-124、2013
- Knight, Frank H. : Risk, Uncertainty and Profit, Dover Publications. (= 1959、奥隅栄喜訳『危険・不確実性および利潤』文雅堂銀行研究社)